

竹アートを通じて、里山と街をつなげたい

設計士として働く傍ら、里山再生活動に取り組む島田さん。大井川鐵道沿線で3月25日(日)まで開催中の『UNMANNED』無人駅の芸術祭／大井川にアーティストとして参加し、放置竹林問題をアートを通じて訴えています。

【日本の原風景「里山」】

結婚を機に、島田市に移り住んだ島田さん。10年ほど前、建築の仕事を通じて、里山に興味を持つようになったと振り返ります。

「里山とは、住んでいる人と自然が共生している所。山林や田んぼは、昔から人の手が入り、管理されています。人が利用することで、里山の中で完結する二次的生態系が確立しているんです」

近年、高齢化や林業の衰退などにより、里山の手入れが続けられず放棄され、この生態系や景観の崩壊が進んでいるといわれています。

「特に『竹』。昔はほとんどの生活道具が竹製でした」



たが、今ではあまり使われなくなつたためか、多くの竹林が放置されています。竹は成長が早く、他の樹木の成長を妨げるだけでなく、里山の環境をも侵食し、深刻な問題となつていくんです」

でなく、竹を活用した里山の保全に取り組んでいます。花器や能舞台を竹で作ったり、青葉シンボルロードに竹灯籠6000個を並べたイベントを開催したりして、竹の持つ可能性を見直し、その魅力を



里山再生に取り組むアーティスト
島田慎太郎さん(東町)

【竹の価値を再構築する】

平成25年、この問題の改善と解決のため、島田さんは仲間と共に「Groomしずおか」を立ち上げました。

「グループでは、静岡市を中心に、竹林の整備活動だけ

伝えていきます。市内にある酒造場では、日本酒づくりに使う仕込み水のろ過材を、木炭から竹炭に変えてもらったんです。取り組みを知ってもらうことで、さらに需要が生まれることを願っています」

【竹アートによる地域活性化】平成27年から、活動の場を島田市へ広げ、地元NPOが企画するアートイベントに参加。一昨年は、川根町抜里地区の竹を使った作品を、抜里駅に展示しました。

「コンセプトは『竹で街中と中山間地域をアートでつなげる』。イベントに参加して何よりうれしかったのは、抜里の皆さんが当事者として、地元竹を使った作品をずっと気に掛けてくれたこと、愛着を持ってくれたことです」

イベントの成果は、来場者数ではなく、そこに住む人にとっての影響を与えるかだと、島田さんは力強く語ります。

「僕の作品を見て『何で竹を使っているんだろう』と興味を持ってもらえれば、狙いどおりですね。地元の人を巻き込むことで、自分たちの住む場所を誇りに思ってもらい、地域が活性化するきっかけになればうれしいです」

地域のさらなる魅力の発掘を想像し、笑みをこぼす島田さん。「竹」から始まる新たな行動の連鎖を、里山から街へとつなげていきます。



抜里地区の竹で作
した巨大オブジェ
(2015・島田駅前)

Shimadajin File #79

島田 Story 人